

カントを読む

—「人間とはなんであるか」をめぐる—

榊 瀧 弘 市

はじめに

カント（1724～1804年）は、その名前がよく知られている哲学者である。しかし、この有名なカントがどのような哲学者であるかを知る人は、それほど多いとは思われない。

カントはこよなく人間を愛し、若者の教育にはとりわけ情熱をかたむけた。このことは、多くの証言が伝えるところである。人間を愛するものには人間に対する憂慮もまたつきものである。カントは、人間を愛し、人間の将来に憂慮して、哲学し、講義し、著述する。

この度の論文はそのようなカントの思想と人柄のいくばくかを、通用の日常の言葉で紹介することを試みるものである。日頃哲学に馴染みのない方々に読んでいただきたくて、この論文を書いた。したがって、研究論文風でも、論争的でもなく、カント自身の言葉を紹介するように心掛けた。プラトンが『国家』で述べている「真似」の表現手法を模範にして、つまりカント自身の言葉を出来るだけ引用しながら、カントを紹介する。

カントには、有名な4つの問いがある。1. 私はなにを知ることができるか？/ 2. 私はなにをなすべきか？/ 3. 私はなにを希望することが許されるか？/ 4. 人間とはなんであるか？の4つの問いである。この度の論文のタイトルは、カントの第4の問いに倣ったものである。「人間とはなんであるか？」という根本的な問いは、「私はなにを」の3つの問いの集大成であるとともに、カント哲学の動機にして推進力であるとも言える。このことをカントの時代が直面した哲学的難題、デカルト

の合理論の身体の問題とヒュームの経験論の懐疑の問題との関連のうちで考察する。そのことの中で、カントによる理性の概念の新たな理解と、「理性的動物」(animal rationale)の概念の意味の変遷を明らかにする。

カントのテキストはアカデミー版を使用した。但し、ドイツ語の表記はカッシーラ版に倣った。

カントの著作の引用は、岩波書店版『カント全集』(全22巻)に準拠している。例えば、(5-130~131、7巻312頁)は、(アカデミー版『カント全集』第5巻130~131頁、岩波書店版『カント全集』第7巻312頁)を表す。

『純粹理性批判』の典拠表記は通例に従う。(『純粹理性批判』A805. B833、6巻88~89頁)は(『純粹理性批判』第1版(1781年)805頁第2版(1787年)833頁、岩波書店版『カント全集』第6巻88~89頁)を表す。同じく(A12、4巻63頁)は(第1版のみ同上)、(B29、4巻90頁)は(第2版のみ同上)をそれぞれ表す。

『道徳形而上学の基礎づけ』は『人倫の形而上学の基礎づけ』(岩波書店版『カント全集 7』)のことである。引用は、岩波書店版『カント全集 7』に準拠する。また『道徳の形而上学』は『人倫の形而上学』(岩波書店版『カント全集 11』)のことである。引用は、岩波書店版『カント全集 11』に準拠する。

引用に際しては、天野貞祐訳、篠田英雄訳を始め、理想社版『カント全集』、熊野純彦訳、石川文康訳、“*The Cambridge Edition of The Works of Immanuel Kant*”をその都度出来る限り参照した。

宇都宮芳明監訳、宇都宮芳明・鈴木恒夫・田村一郎・新田孝彦・嶋崎正躬訳・注解『純粹理性批判』(以文社、2004年)、宇都宮芳明訳・注解『実践理性批判』(以文社、1990年)、宇都宮芳明訳注『判断力批判』(以文社、1994年)には、取り分け多くを負っている。

尚、引用の訳文には、日頃哲学に馴染みのない方々にも通読して頂けることを期待して、通用の日常語を用いて平易な文になるよう心掛けた。

尚、[]は引用者の補注である。

第一章 カントのプロフィール

第二章 カントの或る転機：カントの40歳の頃

1. 著作家カントの誕生

2. カントの『エミール』体験

第三章 カントの4つの問い

第四章 カントの理性的動物の二重性

第五章 カントの時代の哲学的環境の確認

1. 「理性的動物」という言葉の誕生とその意味の変化
2. カントの時代が直面した哲学上の2つの難題——デカルトの合理論の身体の問題とヒュームの経験論の懐疑の問題

第六章 理性の能力の拡張と「理性的動物」の概念の転換

1. デカルトの身体論とヒュームの懐疑論の超克
2. カントの実践についての基本的な考え
3. 道徳の実践のみに与えられる「拡張の権能」について
4. 結 び

おわりに

第一章 カントのプロフィール

「我々のカントは1724年4月22日プロイセンのケーニヒスベルクで生まれた。」カントの最初の弟子の一人として親しく薫陶を受けたボロフスキ (L. E. Borowski, 1740-1831) の『カントの生涯と性格』はこのように始まる。この伝記は、カントと同じ町に生まれ育ったボロフスキによって書かれた。内容についてはカントの承諾を受けて、カントが昇天した年の1804年に出版された。

バルト海に面するケーニヒスベルクは当時の東プロイセンの首都であり、海外交易都市で賑わった国際都市であった。父のヨーハン＝ゲーオルゲ＝カント (1682年-1746年) は、馬具屋町に構いをもつ馬具匠であり、母のレギーナ＝ドロテーア (1698年-1737年) は、信仰の深い敬虔派の女性であった。カントは正直で、勤勉で、敬虔な両親のもとで成長した。父方の祖先はスコットランドの出身で、父はカントをCantと綴り息子のカントの代になってKantと綴ったそうである。カントは姉二人、兄一人、妹が四人、第一人それにカントを加えて九人の兄弟姉妹の第四子の次男として誕生する。しかし健やかに成長したのは、カントと5歳上の姉と3歳下の妹と7歳下の妹、それと11歳下の末弟の5人であった。

カントは養育院付属学校で読み書きを習い、1732年に母の影響で

ビエティスムス

敬虔派の信者シファートが初代院長をしていたフリートリヒ学院に入學した。しかし、1737年12月に母が39歳の若さでこの世を去る。カント13歳の冬のことである。学院には1740年まで通った。この時代にカントはローマの古典文学に深く親しむ。カントの著作にホラティウスをはじめローマの古典文学からの引用が多いのはその当時の成果の表れである。

学院を出た年のミケル祭の頃、16歳のカントは故郷のケーニヒスベルク大学に進学する。1746年まで約5年間大学に通う。大学ではマルティン・クヌツェンの哲学と数学の授業に欠かさず出席した。しかし、1746年大学卒業の年の春、父が64歳で永眠する。カント21歳の時のことである。翌年の1747年に卒業論文の『活力測定考』（『活力の真の測定に関する考察』）を母方の伯父の靴匠リヒターの援助を得て出版する。

生活のためにほぼ10年にわたって、家庭教師をする。当時の家庭教師は普通その家に住み込むのが習慣だった。この時代のおそらく最後のころのことと思われるが、カントは「数年の田舎生活と勉強とを非常な満足の念をもって」回想している。

1755年31歳の時、母校ケーニヒスベルク大学のマギスター・レゲンス（私講師）となる。伝記作家のボロフスキはこの頃からのカントの学生である。彼は1755年6月12日のカントの学士号授与式に出席した時の光景を感動をもって描いている。私講師とは大学での講義の有資格者のことである。講師報酬は聴講生の毎回の聴講料によるものであり、身分も収入も不安定なものである。しかし、伝記の著者によると、カントの講義は好評で何時も満員だったそうである。もう一人の伝記作家ヤハマンによると、最初の数年間は、「糊口の計に窮する場合も稀ではなかった」そうである。1766年王立図書館の副司書官の職を得る。カント42歳の最初の定職である。

1770年、カント46歳の時ケーニヒスベルク大学の論理学と形而上学の正教授となる。「数多くの大学で、ドイツ語もしくはラテン語を用いる社会で、教授の肩書を得るまでにカント程長い浪人であったものは全然ないのである」とボロフスキは記している。カントは事情が許すようになると、弟妹の生活を出来る限り支えた¹。

¹ ボロフスキ著・山本英一訳『カントの生涯と性格』（弘文堂1949年）。ヤハ

カントは1770年の就任論文『可感界と可想界の形式と原理』の後一つも論文を出版していない。世に言うカントの「沈黙の10年」である。1781年に哲学史上の画期的名著『純粹理性批判』を著す。『純粹理性批判』を筆頭にその後数々の偉大な哲学作品を著す。

1764年のカントの最初の著作である『美と崇高の感情にかんする観察』が出版されるまでのカントの研究論文の一覧は次のようである。

1747年『活力測定考』(卒業論文) 22歳／1754年『地球自転論』30歳／1754年『地球老化論』30歳／1755年『火について』31歳／1755年『天界の一般自然史と理論』31歳／1755年『形而上学的認識の原理』31歳／1756年『地震原因論』32歳／1756年『地震の歴史と博物誌』32歳／1756年『地震再考』32歳／1756年『自然モナド論』32歳／1757年『自然地理学講義要綱公告および(西風論)』33歳／1759年『オプティズム試論』35歳／1762年『三段論法の四つの格』38歳／1763年『神の存在の唯一可能な証明根拠』39歳／1763年『負量の概念を哲学に導入する試み』39歳／1764年『美と崇高の感情にかんする観察』40歳

以上の論文一覧から明らかなように、若い頃のカントは自然科学に対する関心が強かった。

第二章 カントの或る転機：カントの40歳の頃

1. 作家カントの誕生

最初の著作『美と崇高の感情にかんする観察』の反響によって、カントはドイツ出版界に華々しいデビューを果たす。この作品は、作家カントの誕生の記念碑的名作である。それについては、伝記作家ボロフスキの報告を紹介するのが最もよい。「世人は學術雑誌に収載されたクローザツ、ハチンソン、アンドレアや他の人々の同種の論説よりもこの観察

マン著・木場深定訳『カントの生涯』(理想社1978年)。坂部恵『カント』(『人類の知的遺産 43』講談社、1979年)。

の方が優れたものであると見ている。そうして内容が公益に役立つ点だけではなく、本書の筆致に見られる機知と陽気な気分とを賞賛している。リングウ時報（第七巻 353 頁以降）には著者がドイツのラ・ブリュイエールとよばれている。また多くの評論家達は、学者の書斎のみでなく、貴婦人の化粧室にも本書が決して欠くことのできないものであると述べている。²」

「カントは花咲く古典研究の広野を出て哲学の不毛の荒野に身を投じ、古典研究に対する背教者となってしまった」というカントと親交のあった同年代のドイツの著名な古典学者ルーンケン（Ruhnken, 1723-1798）の嘆きもまた真実なのである³。この書によって、われわれは哲学者カントが古典文学に明るくばかりでなく、最新の小説や出版物をあまねく読破していることを知ることが出来る⁴。その上誰もが絶賛する名文家であることを知ることが出来るのは幸いなことである。

後年の 1790 年、カントは『判断力批判』において「美と崇高の感情」に関する考察を行う。この著作は、カントが早くから「美と崇高の感情」に深い関心を抱いていたことを示す。

1764 年の著作では、美しい行為、美しい性質、美しい形姿が観察される。しかし、26 年を経た 1790 年の論文では例えば次のようである。

「快適さは、理性のない動物にもある。」しかし「美は人間にのみ、つまり動物的であるがそれでも、理性的な存在者、しかしまたたんに理性的（たとえば靈魂）ではなく、同時に動物的である理性的存在者にのみ、ある。」だが「善はあらゆる理性的存在者にある。」（『判

² ボロフスキ『カントの生涯と性格』54 頁。

³ ボロフスキ『カントの生涯と性格』132 頁。

⁴ ルソー（J. J. Rousseau, 1712-1778）のみならず、ミルトン（Milton, 1608-1674）やポーブ（A. Pope, 1688-1744）はカントの愛読書である。それと『センチメンタル・ジャーニー *A sentimental journey through France and Italy*』（1768）のスターン（L. Sterne, 1713-1768）の『トリストラム・シャンディ *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*』（1760-1767）は、カントの愛読書の中の愛読書である。

断力批判』5-210、8巻64～65頁)⁵

39歳のカントにとって「美の感情」は、「美の感覚」であった。26年の歳月の中で「美の感情」は豊かな知性にまで高められた。「美の感情」は美自身であるかのように、自らを語り始める。美は単に観察されるものではない。美は人間存在の「恩恵」(Gunst)であると語るのである。(同上)

2. カントの『エミール』体験

私は根っからの学者だ
 知ることを渴望し、ものを知りたいという貪欲な不安にとらわれ、
 一步進むごとに満足をおぼえる。
 私は、このことのみが人間の榮譽になりうると信じ、
 無知な俗衆を軽蔑していた時代があった。

ルソーが私を正道に戻してくれた。
 目のくらんだおごりは消え失せ、
私は人間を尊敬することを学んだ (ich lerne die Menschen ehren.)。

もし、この尊敬の考えが、他のすべての研究に人間の諸権利を確立する (herstellen) という価値を与えることができるのだと私が信じなかったならば、私は自分をありきたりの労働者よりずっと無用な者だとみなすことだろう。(『遺稿集』20-44、18巻186頁)⁶

ルソーの『エミール』に読みふけて、カントが日課の午後の散歩を失念したという有名な逸話は、1764年、カントの40歳頃のことでであると推定されている。このカントの告白にも似た文章は、他人に読まれる心

⁵ この引用文は読みやすいようになっている。

⁶ 坂部恵『カント』(『人類の知的遺産 43』講談社、1979年)は、カントのこの言葉を3度にわたって紹介する。繰り返しの強調表現法でその重要性を喚起している(18～19頁、87頁、105頁)。引用文はその翻訳に倣う。

配のない自家用本の『美と崇高の感情にかんする観察』の中に書き込まれていたものである。後に遺稿の中から発見された。

論文・出版物一覧（その2）

1764年『脳病試論』40歳／1764年『自然神学と道徳の原則の判明性』40歳／1765年『1765-66年冬学期講義計画公告』41歳／1766年『祝霊者の夢』42歳／1768年『空間における方向の区別の第一根拠について』44歳／1770年『可感界と可想界の形式と原理』46歳

— 沈黙の10年⁷ —

1781年『純粹理性批判』57歳／1785年『人倫の形而上学の基礎づけ』61歳／1787年『純粹理性批判』第2版63歳／1788年『実践理性批判』64歳／1791年『判断力批判』66歳／1793年『宗教論』69歳／1794年『万物の終わり』70歳／1795年『永遠平和のために』71歳／1796年老衰のため講義をやめる。72歳／1797年『人倫の形而上学』73歳／1798年『人間学』74歳

以上の一覧にある様に、カントは、『純粹理性批判』（1781年）、『実践理性批判』（1788年）それと『判断力批判』（1790年）の哲学史的大著を出版する。3つの哲学史的大著はタイトルに共通する「批判」という語によって、3つの批判書、ないし三批判と呼ばれる。

ところで、三批判のタイトルの「批判」の語の意味は、われわれが普段日常的に使用する場合の「批判」の語の意味と同じわけではない。

カントは、「批判」（Kiritik クリティーク（独）；critique（英））とは

⁷ カントが1770年の『可感界と可想界の形式と原理』を最後に、1781年の哲学史的大論文『純粹理性批判』の出版までの11年間のあいだに出した、公刊物は1771年47歳の『モスカティ論評』の書評(2-421~425、3巻387~391頁)、1775年51歳の『さまざまな人種について』の講義告知(2-427~443、3巻393~415頁)それと1776-77年52-53歳『汎愛学舎論』の新聞寄稿(2-445~452、3巻417~425頁)に留まる。この11年間をカントの「沈黙の10年」と世に言うのはそのためである。カントの臥竜鳳雛(がりょうほうすう)の10年を讀える言葉である。

「自分の力量を知ること」であると言う。「批判」とは自分の力量の吟味であると言う。また、「批判」（クリティーク）とは「吟味し検査する探索」（prüfende und musternde Durchsuchung）のことであるとも言われる（『純粹理性批判』A 739 B 767、6巻34頁）。説明的に言い換えるなら、吟味する、検査する、そればかりでなく金の脈を捜すように新たな探索もする、ということである。

カントの「批判」（Kiritik；クリティーク）は、語源のギリシア語の「（クリーネイン）」の言葉通りに、「分けること、区別すること、判断すること、判決すること」であり、カントにおいては、自分の能力を見きわめることなのである。従ってカントは、理性の「クリティーク」のことを「理性の自己吟味」（『純粹理性批判』A745B773、6巻40頁）と簡潔に表現する。カントの3つの批判書の「批判」とは、吟味・検査・探索であり、自己吟味のことなのである。われわれに身近な言葉では、自己吟味は自己解明であろう。

第三章 カントの4つの問い

カントによると、哲学のはじまりは疑問である。もう一步踏み込むなら、哲学のはじまりは疑問と情熱である。哲学のはじまりは驚きであると言ったのはアリストテレスである⁸。それに対して、哲学のはじまりは悲哀であると言ったのは西田幾多郎である⁹。いずれも哲学のはじまりを考える際の厳粛な洞察である。しかし、驚きと言っても悲哀と言っても、そこから「なぜ」という疑問が生まれなければ、哲学ははじまらない。その理由を知りたいという気持ちが心の中でしだいに醸成され、その疑

⁸ アリストテレスは主著『形而上学』（第1巻第2章）で、「知恵を愛求する」哲学の始まりは、「物の現にそうあるのを見てそのなにゆえにそうであるかに驚異の念をいだくにある」と述べる（『アリストテレス全集 12 形而上学』岩波書店、1977（1968）年、11～12頁）。

⁹ 西田幾多郎『無の自覚的限定 場所の自己限定としての意識作用』（1931年）を当時61歳の西田は「哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならない。」という一文で結ぶ（『西田幾多郎全集 第六巻』岩波書店、1965年、116頁）。

問を解決したいという強い情熱が生まれなければ、哲学をするという行為ははじまらない。この情熱が知りたい、解決したい、という欲求衝動にまで高まった時、はじめて哲学は実際にはじまる。カントの根拠への問いはこのようにして始まる。

カントには有名な4つの疑問がある。カントの「4つの問い」というのが、一般的な言い方である。

1. 私はなにを知ることができるか？
2. 私はなにをなすべきか？
3. 私はなにを希望することが許されるか？
4. 人間とはなんであるか？

以上の4つの問いの最初の3つ問いは、3つの批判書の『純粋理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』にそれぞれ対応する。1の「私はなにを知ることができるか」は『純粋理性批判』が研究テーマにする、数学や自然科学の理論の領域の問いである。2の「私はなにをすべきか」は『実践理性批判』が研究テーマにする、われわれの行為の規範の領域の問いである。端的に言って、道徳哲学や義務論と呼ばれる分野の問いである。従って『実践理性批判』は内容からすると、「道徳的実践的理性の自己吟味」ということになる。『実践理性批判』の「実践」は、技術や実生活のための経験知、実技、実学のことを研究の対象にしているわけではない。3の「私はなにを希望することが許されるか」は、『判断力批判』に対応する。『判断力批判』は「われわれ人間の美と崇高の感情」と「自然はまるで何かの目的のために創られたかのように、感じたり考えたりすることの出来る自然の秩序や神秘」についての研究である。従って3の「私はなにを希望することが許されるか」と『判断力批判』の対応の関係を簡潔に説明するのは至難である。

『純粋理性批判』の分野と『実践理性批判』の分野は、第三の批判書『判断力批判』の分野によって、総合されるとカントは述べる。そうである

ように、1の「私はなにを知ることができるか」(形而上学の問い)と、2の「私はなにをすべきか」(道徳の問い)とは、3の「私はなにを希望することが許されるか」(宗教の問い)によって総合される。今は、「希望は幸福を目指す」というカントの言葉を紹介するにとどめる。4番目の「人間とはなんであるか」は「人間学の問い」である。

第四章 カントの理性的動物の二重性

さてここで、カントの3つの疑問とそれを集約する最後の「人間とはなんであるか」という4番目の疑問との関係について考えてみたい。3つの問いの解決が「人間とはなんであるか」の解決につながる、と考えることも出来る。しかし「人間とはなんであるか」という疑問に対してカントは最初から根本的な見解を持っている。その根本的基盤に立って、カントは3つの問いを設定する。最初の3つの問いの解明が更に一層深い人間に対する理解へと導く。そのような論理の構造になっている。つまり、「人間とはなんであるか」の問いが、「わたしは何を」の3つの問いに分節化し、両者が互いに応答するなかで、カント哲学の体系は形成されていく。カントを理解するためには、カントの「人間とはなんであるか」という根本的で本質的なとらえ方を確認しなければならない。『モスカティ論評』(『動物と人間の構造の身体上の本質的相違について』の論評)(1771年)でカントは次のように述べる。

「自然の最初の配慮は、人間は動物として自分および自分の種のために保持されよ、ということだったのであり、このことのために、人間の身体内部構造、胎児の状態、そして危険状態での自己保持に最もふさわしいのは、四足の姿勢であった。しかしまた、人間の中には、理性の萌芽が据えられていて(ein Keim von Vernunft gelegt sei)、これゆえに人間は、その萌芽が発達するとき社会生活をするように定められている(für die Gesellschaft bestimmt)……これによって「人間は、一方で動物には果てしなく優位に立つが、しかしまた、[四足動物から二足歩行になって]自分の頭を昔からの仲間に対して誇らしげに持ち上げたことから生じる不都合なことにも我慢

しなければならない。』（『モスカティ論評』（2-425、3巻391頁）。

カントの47歳の時のこの言葉ほど、カントの人間理解の基本構造を簡潔に語るものはない。①人間は、個人として種として自己保存を義務づけられていること。②人間の理性は「理性の萌芽」(ein Keim von Vernunft)の状態から次第に成長発達するということ、しかもその成長発達が何時どの時点で完成したと言うことについては触れられていないこと。③人間は理性を有する点で他の動物よりはるかに優位に立つが、それにとまって生じる不都合なことにも耐えなければならない。

以上の三つのことの①と③は予測の範囲である。しかしカントの思想の②のことは、見過ごされがちである。カントは批判の体系つまり人間の理性の吟味検査と解明において、理性を既に完成し発達した止まったものとして静態的に観察記述するのではなく、生きて運動し成長し増殖する生体的理性の姿を解明してゆく。

また、『人間学』（『イマヌエル・カントによって著された実用的見地における人間学』（1798年）のフルタイトルから明らかのように、当時としては老齢の74歳のカント（1724-1804）が長年の講義ノートをもとに自らの編集出版した、『人間学』には次のようにある。

生物の分類体系の中に人間という種族を位置づけ、その特性を述べるには、次のように言う他はない。人間は、自分自身で設定した目標に従って自己を完成する能力をもったものであるから、人間は自ら創造するところの性格をもつものであると。このことによって、理性能力を賦与された動物 (mit Vernunftfähigkeit begabtes Tier (*animal rationabile*)) としての人間は、自分自身を理性的動物 (ein vernünftiges Tier (*animal rationale*)) たらしめうるのである。（『人間学』7-321¹⁰、15巻312頁）

¹⁰ Es bleibt uns also, um dem Menschen in Sytem der lebenden Natur seine Klasse anzuweisen und so ihn zu charakterisieren, nichts übrig als: daß er einen Charakter hat, den er sich selbst schafft, indem er vermögend ist, sich nach seinen von ihm selbst genommenen Zwecken zu

人間は確かに「理性の萌芽」(ein Keim von Vernunft)を有する動物であり、理性能力を与えられた動物である。しかし、人間のこの状態は理性的動物としての人間の始まりであって、完成ではない。素質としての理性的動物は、自己完成に向かって自己形成するように定められている。

これがカントの「人間とはなんであるか」の問いに対する第一の基本的根本的答えであり、カントの人間理解である。ここからカント哲学の全てが始まる。カントは問う。「人間とはなんであるか?」、カントは答える。「人間とは理性的動物である。」その上で、さらにカントは答える。人間は二重の意味で理性的動物である。人間は動物にして理性の萌芽を備えた地上の住民である。これは理性的動物としての人間の原点であり、このことはあくまでも理性的存在者としての人間の原点である。しかし、カントによると、人間は理性的動物としての「自己完成」を目指す。つまり、理性的動物は人間の自然の素質であると同時に人間が向かうべき理想とする目標である。理性的動物の二重性とはこのことを意味する。この人間理解は、カント哲学の変わることのない基本的見解である。理性的動物は人間にとって現実であり理想である。それが人間の二重性を意味する。

第五章 カントの時代の哲学的環境の確認

1. 「理性的動物」という言葉の誕生とその意味の変化

カントは、先に引用した『人間学』において、「理性能力を賦与された動物」(mit Vernunftfähigkeit begabtes Tier)と「理性的動物」(ein vernünftiges Tier)は決して同じものではないと、明確に区別している。カッシーラが編集出版した『カント全集』(通称カッシーラ版)は、ラテン語対訳を斜字体で表記することによって、読者の注意を喚起する。「理性能力を賦与された動物」(*animal rationabile*)、「理性的動物」(*ani-*

perfektionieren; wodurch er als mit Vernunftfähigkeit begabtes Tier (*animal rationabile*) aus sich selbst ein vernünftiges Tier (*animal rationale*) machen kann) (7-321、15巻312頁)

mal rationale) という具合である (『人間学』 7-321、15 卷 312 頁)。

ところで、「人間は理性的動物である」という人間の定義の起源は、古代ギリシアのアリストテレスが、人間のことを「言葉をもつ動物」(zoion logon echon) といったことにまで遡る。「言葉をもつ動物」は、中世のヨーロッパで「理性的動物 animal rationale」という言葉に翻訳され、広く定着した¹¹。「理性的動物 animal rationale」の rationale は名詞の ratio (理性) の形容詞である。トマス・アクィナスの『神学大全』には、「理性 ratio という名称は、探求 inquisitio と推論 discursus から採られている」とある¹²。それによると、ratio という語は「inquisitio：探検・吟味」と「discursus：推論・推論過程」を指示する¹³、つまり ratio は思考能力を指示する語である。「理性的動物 animal rationale」とは「思考能力を備えた動物」という意味である。ラテン語の animal が「生命」

¹¹ L.アルムブルスター「超越と内在の『間』」(『講座 哲学 I 哲学の基本概念』東京大学出版会、1973年、189～206頁所収)の「理性を備えた動物」(191～195頁)は、animal rationale の人間の定義の誕生と定着の様子を次のように伝えている。内容を要約して紹介する。中世思想がその頂点にたった13世紀の中頃、トマスがバリエで発表した最初の著書『有と本質において』(De ente et essentia)のなかで、「人間は animal rationale と言われる」といかにも当然なこととして述べられている。ところで、ラテン語の animal rationale の起源は、ギリシアのアリストテレスに遡る。アリストテレスは、人間のことを「言葉をもつ動物」(zoion logon echon) と表現した。アリストテレスのギリシア語の通りに「言葉をもつ動物」というラテン語に移し変えることもできたはずである。また「ギリシアの都市国家において最も大切にされた言葉は、自由民が広場で政治を論ずる言葉であったことを考えあわせてみると、「公に政治を論じる権利をもつ動物」と訳すこともできたであろう。しかし、この定義は、13世紀のトマス・アクィナスの手に渡ったときには、ロゴスの思考能力や理論的能力の意味が表面に出て、ratio と訳されたため、人間の規定は「理性を備えた動物」という意味に定着し、その形で中世の人びとに親しまれていった。

¹² トマス・アクィナス『神学大全 Summa theologiae』(II. II. 49.5)。『神学大全』(XVII、創文社、1997年) 256頁。

¹³ 『トマス・アクィナス『神学大全』語彙集(羅和)——創文社版、中央公論社版による——』(長倉久子・蒔苗暢夫・大森正樹編集、新世社、1988年)の「inquisitio と discursus」の項を参照。

(anima) のある「生きている物」(animal) のことであるから、「理性的動物」や「理性を備えた動物」と訳出される“animal rational”という言葉は、「思考する生物」のことである¹⁴。

当時、思考能力は人間に固有の能力で、人間以外の動物がそのような能力を持ち合わせているなどということは思いもよらないことであつた。従つて、人間を定義する「人間(S)は理性的動物(P)である」という命題は、人間と理性的動物は内包と外延が1対1対応の関係にある。従つて主語(S)と述語(P)を入れ替えた「理性的動物は人間である」もまた真である。「人間は理性的動物である」という定義は、定義として完全であり、無条件的に真理であつた。

しかし、カントの時代になると、自分の街に居ながらにして世界中の情報が入ってくるようになる。当時ドイツは翻訳大国であつた。人々はその恩恵に大いに浴していた。カントの大部の著書の『自然地理学』の「世界各地の自然的特徴に関する地理学的な知識」には、「千島列島」(die kurilischen Inseln) が登場する(『自然地理学』9-405、16巻364頁)。「地球上に分布するものに関する個別的な観察」の章には「マナティが千島列島で見られた」という報告の記述もある(『自然地理学』9-342、16巻265頁)。そのように世界中のあらゆる動植物の生態が事細かに書き記されている。例えば、カナダのハドソン湾周辺に生息するビーバーの生態について、まるでダム造りの職人のことでもあるかのように、カントは書いている(『自然地理学』9-338~339、16巻260頁)¹⁵。カントをはじ

¹⁴ トマス・アクィナス『有と本質について』の現代のラテン語・ドイツ語対訳本(Thomas von Aquin *Über Seiendes und Wesenheit, De ente et essentiali, Lateinisch-Deutsch*, Felix Meiner Verlag, Roma, 1976, 28~29)での、animal rationale のドイツ語対訳は「思考する生物 das Denkfähige Lebewesen」である。

¹⁵ 「ビーバーは川を堰き止めて草原に池を造る。これは自分の歯で木々を切り倒し、長さが3から10フースまでの木材を引きずる。そしてそれらを川向うの住処(すみか)まで運び、冬にはその樹皮を食べる。ダムを築くさいには、まずその尻尾が手押し車として使われ、かれらは尻尾の上に膠(にかわ)を着けて〔木材を〕所定の場所に引っ張っていくのである。ついで尻尾は左官用の鏝(こて)として使われ、かれらはそれで膠を木々に塗りつけて〔運んできた木材を〕固定するのである。人々はビーバーを食べてもいる。」(『自然地理学』9-338~339、16巻260頁)。

め多くの研究者たちは、人間ばかりでなく一部の動物には知能が備わっており、理論的に思考することが出来ることを認めるようになった。カントは、動物の理論的思考能力を認めていたと思われる。何故なら、カントは「理性は、その理論的な能力からしても十分に、生ける身体をそなえた存在者の性質 (die Qualität eines lebenden körperlichen Wesens)でありうるであろう」(『道徳の形而上学』6-418、11巻287～8頁)と、無造作に述べているからである。「理性的動物」(animal rationale)という言葉が単に「思考する生物」(das Denkfähige Lebewesen)を意味するだけの言葉であるなら、この言葉は、もはや人間の定義には、相応しくなかった。「人間は理性的動物である」という定義は、厳密な意味での人間の定義としての真理性を失っていた。

とはいつても、カントの時代、おそらくカントも使用したと推測され得る『哲学辞典』(1733年版)にもあるように、「人間は animal rationale である」という言葉は、「人間に関する普通の定義」(die gemeine Definition eines Menschen)であった¹⁶。研究者や知識人の間ではその真理値に陰りが射してはいたものの、「理性的動物」という概念は「普通一般に」(gemein)最もよく受け入れられていたばかりでなく、依然として大多数の人々にとって最も納得できる人間の定義であった。

2. カントの時代が直面した哲学上の2つの難題 — デカルトの合理論の身体の問題とヒュームの経験論の懐疑の問題

時代はデカルト以来の合理論とロックからヒュームの経験論の影響の下にあった。近代の合理論と経験論は、共に中世スコラの神中心コスモロジーの世界観に取って変わる人間中心の世界観の構築を企画した。両者は共に人間の人間による客観的で絶対的に確実な知識の確立を目指した。合理論者にして、近代主観主義の始祖であるデカルトは精神の力にのみ注目した。デカルトは精神を身体から独立に純粹にすることによって、絶対的に確実な知識に到る道を探る。デカルトの方法的懐疑と呼ばれる方途である。デカルトは「疑いうるもの」をすべて排除して行く。錯覚の原因となる

¹⁶ Walch, *Philosophisches Lexicon*, Leipzig, 1733 (published by Thoemmes Press, 2001) S. 2569 (頁)。

身体的感覚が、まず最初に排除される。ついには数学的真理もその絶対的確實性を疑われ、相対的に確實な知識であることが明らかになる。しかし、最後まで「疑うことのできないもの」が残った。それは「疑う」我である。言い換えるなら「考える」我である。このようにして、「我思う、ゆえに、我在り」(cogito ergo sum) という絶対的に確實な知識が確立される¹⁷。このようにしてデカルトによって、精神と身体は完全に分離される。従って、前者にあるものは、後者にあってはならず、後者にあるもの前者にあってはならない。精神には生命があり、身体には物体という延長がある。精神は延長の無い生命そのものであり、身体は生命の無い物体そのものである、と言うことが帰結される。それにともなって、思考する能力が備わっていないと考えられていた動物は、生命の無いただの物体であるということになる。動物は歯車とゼンマイとの組み合わせられたもののように機能する機械と見なされるに到った。デカルトの「動物自動機械説」である¹⁸。

もう一方のイギリス経験論のロックは、人間の心は「白紙 (white Paper)」であると考へた。別の言い方では「タブラ・ラサ (tabula rasa)」、つまり「拭^{ぬぐ}われた石板」と考へた。この言葉によってロックは、人間の心には生得的に書き込まれた「生得原理」や生得的「知識」が存在しないことを主張した。知識や法則や原理と呼ばれるものは、全て例外なく、身体^{からだ}の視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚の五つの感覚を通して得られた所与 (data) を素にしたものであると、ロックは考へる。このようにして、ロックは、人間は人間自身の力で、客観的で確實な知識の体系を構築する能力があることを証明する。デカルトの合理論とロックの経験論は、共に大きな転換期にあった時代の精神の要請に応えたものであり、時代精神のエネルギーの成果である。しかし、それからほぼ1世

¹⁷ デカルト著、谷川多佳子訳『方法序説』岩波文庫、2004 (1997) 年、46 頁。

¹⁸ G・ロディス・レヴィス著、小林道夫・川添信介訳『デカルトの著作と体系』(紀伊國屋書店、1990 年) 93~94 頁/133~134 頁/394~396 頁。所雄章『デカルト II』(『思想学説全書 15』勁草書房、1971 年) 326 頁。小林道夫「デカルト」(『哲学の歴史 第 5 卷 デカルト革命【17 世紀】』中央公論新社、2008 (2007) 年、所収) 247 頁。

紀後のカントの時代は、両者の問題点がいよいよ深刻なものとなって、顕現した時代であった。

デカルトの合理論によって、人間の身体は一方的に^{おとし}貶められた。人間の身体は生命のない、精神の操り人形と化した。その結果、人間において自明とも見なされる心と身の相互関係の説明の方途が絶たれる。「健全な精神は健全な身体に宿る」などと言うのは、学問的には自分の無知を明かす危険な言葉になってしまった。

ロックに始まるイギリス経験論は、ヒュームに到って、いつしか人間の心は「知覚の束」にすぎないという結論を導き出すに到る。人間の「知性」(the Understanding)は「思考する力」ないし「知覚する力」であるというロックの経験論¹⁹の帰結である。ヒュームは全てを疑う。人間の本性に従って、物事に対する検討を徹底して論理的に推し進めていくなら、確実に客観的な真理は何一つない。但し、数学を除いて。これが、ヒュームの懐疑である。理性であれ、物体であれ、精神であれ、ヒュームの懐疑の網の目を逃れることはできない。ヒュームの懐疑の極め付きは、「人格の同一性」に対する懐疑である。ヒュームにとつて、人格とは自我のことである。人々が「人格の同一性」と信じているものは、「想像力による虚構に他ならない²⁰」。ヒュームはわれわれの自我について、次のように言う。「自我というものは〔感覚を通して得られた〕さまざまな知覚の束あるいは集合にほかならず、それらの知覚は考え得ないほどの速さで相互的に相継いで起こり、絶えざる流動と運動の中にある²¹。」ヒュームは、人間の心と言われているものは、身体感覚の産物である「さまざまな知覚の束ないし集まり」であるにすぎないと声明し、「自我」の観念を否認する。「人格の同一性」に対する懐疑とは、「人格の同一性」の否認に他ならない。これはヒュームという「理性的動物」つまり「思考する動物」によって導き出された人間論である。徹底して論理的に思

¹⁹ 下川潔「ロック」(『哲学の歴史 第6巻 知識・経験・啓蒙【18世紀】』中央公論新社、2008(2007年)、(83~167頁)所収)106頁。

²⁰ 中才敏郎「ヒューム」253頁。

²¹ ヒューム著、土岐邦夫訳『人性論』(『世界の名著 ロック ヒューム』中央公論社、1970(1968)年所収)471頁。

考したヒュームの結論である。更にまたヒュームによると、「理性は非能動的 (inactive) であり」、「理性は能動的な道德規則の源ではありえない」²²。経験論は、人間の心は「知覚の束」であるに過ぎないという自らの帰結によって、懐疑の母に^{カオス}変し、「混沌と闇夜の母」となった。

カントは「初めて混沌があつた。カオスから暗黒と夜とが生まれた」と歌われた、ギリシア神話の太母神ガイアの時代^{エレボス ニュクス}²³を想起こそすかのように、ヨーロッパ世界は何時のまにか、「次第に完全な無政府状態に退化し」（『純粹理性批判』Aix、4巻16頁）については「倦怠とまったくの無関心」の支配する時代、「混沌と闇夜の母」の支配する時代（『純粹理性批判』Ax、4巻17頁）に戻ってしまったと嘆く。ソクラテス、プラトン、アリストテレスの遙か以前の時代に戻ったと慨嘆する。

第六章 理性の能力の拡張と「理性的動物」の概念の転換

1. デカルトの身体論とヒュームの懐疑論の超克

カントは、デカルトの身体論に対しては中世以来の最も普及している人間の定義を躊躇することなく援用する。デカルトの権威に対抗し、それに異議申し立てをするには、「人間は動物である、ただし理性を備えた」という伝統的な通用命題に優るものは何一つなかったからである。よく知れ渡っている一般常識の良識に、カントは訴えるのである。デカルトの「動物機械論」に対する反論の根拠は常識に訴える反論であつて、「批判的な反論」ではない。カントは先を急いでいたのである。

「人間は理性的動物である」という定義の「動物」の概念は、デカルトに対して最も強力かつ有効な反論の武器となった。しかし、ロックによって始まりヒュームに至つた経験論に対しては全く無力であつた。しかし、この「思考する動物」の代表ともいえるヒュームの懐疑は乗り越えられなければならない。なぜなら、カント自身が『実践理性批判』において、証言するように、「デヴィッド・ヒュームは、純粹理性のあれこれの権利に

²² 中才敏郎「ヒューム」262頁。

²³ F.ギラン著、中嶋健訳『ギリシア神話』青土社、1982年、16頁。

あらゆる異議を唱え、そうした権利の全面的な精査を避けて通れないものとした本来の仕掛人であった」(5-51、7巻195頁)からである。そればかりか、ヒュームによると、理性は「非能動的」(inactive)である²⁴。英語の inactive という語の初出は1725年で、ヒューム(1711-76年)の少年時代に登場する語である²⁵。inactive という語は、「不活発な、静止している」を意味する語である²⁶。ヒュームによると、理性は「不活発な、静止している」能力であるということである。従って、当然のことながら「理性は能動的な道德規則の源ではありえない」²⁷。カントはヒュームの懐疑と戦うために、われわれ人間の理性は思考のみならず、道德においても能動的な能力を発揮することが出来ることを、人間理性の吟味と検査によって証明する哲学事業に新たに取り組むのである。

思考するヒュームの懐疑の超克は中世以来のラテン語の「理性」(ratio)の意味がドイツ語の「理性」(Vernunft)において、思考の能力ばかりでなく、道德の能力を有することが判明することに繋がるのである。結果的に、理性の能力は理論の領域と道德の領域において、共に働く能力へと拡張することになるのである。

しかし、それは、まぎれもなく哲学史的な大事業だったのである。何故なら、これまで「哲学者たち」は例えば「誠実」(Wahrhaftigkeit)の「徳」(Tugend)のような、人間の「内的な(道德的な)性格」(ein innerer (moralischer) Charakter)のことを、「敬虔な願望」の対象として、それも「断片的に」語っていただけで、哲学のテーマとして、「全体的に」真剣に取り上げたことはなかったからである(『人間学』7-295、15巻270頁)。道德の問題を理性の問題として、探索するなどということは、何人にも思いもよらないことだったからである。それが哲学史的大事業であるというのは、理性は思考の能力であり、道德には無関心であるという、伝統な通念に対する挑戦でもあったからである。

しかし、もし人間の理性の本性が理論的に働くばかりでなく道德的に

²⁴ 中才敏郎「ヒューム」262頁。

²⁵ 寺澤芳雄編集主幹『英語語源辞典』研究社、1997年。

²⁶ 同上。

²⁷ 中才敏郎「ヒューム」262頁。

も働く能力を持つということが解明された時には、思考と道徳は理性という同一の知性能力の「二重の性質」(zwiefache Qualität)であることが明らかになる。思考と道徳が理性のうちに統一されているということは、人間は理性という統一的な基盤を自分自身のうちに有する、唯一の動物であることが哲学史上初めて解明され、確立されることになるカントは、ヒュームに対する果敢な挑戦のうちで、何時しか、この哲学史的難事業の道を行っていたのである。

ヒュームの「人格の同一性」に対する懐疑と否認を学問的にそれも完璧に超克する方法は、人格の実在性を確実かつ客観的に証明することを置いて他に道はない。道徳的人格の実在性の証明にカントは向かう。

道徳的人格の実在性の証明を最も明解に最初にカントが表明するのは、有名な実践理性の道徳的命法においてである。

「自分の人格のうちにも他のだれもの人格のうちにある人間性を、自分がいつでも同時に目的として必要とし、決してただ手段としてだけ必要としないように、行為せよ。」(『道徳形而上学の基礎づけ』4-429、7巻65頁)

という実践理性の道徳的命法においてである。『道徳形而上学の基礎づけ』(1785年)に続く『実践理性批判』(1788年)において、カントは道徳的人格の実在性を証明するために一層の努力をするのである。カントは『実践理性批判』(1788年)において、「純粹理性が実践的な力もちうること」、つまり「あらゆる経験的なものにとらわれることなく自らの意志を決定できること」を明らかにするために、全力を傾注するのである。

「理性」はその語の由来からして、思考や推論の理論的な力しか持っていないと考えられていた。そのような時代の中であって、カントは理性は実践的な即ち道徳的な能力を積極的に発揮することのできることを、理性のクリティークという理性の自己吟味、理性の理性自身による自己解明によって、証明する仕事に更に一層打ち込むのである。それによって、われわれ人間の理性の能力は単なる理論的なレベルから実践的なレベル即ち道徳的なレベルへと拡張することになるのである。

2. カントの実践についての基本的な考え

カントは実践の概念を「技術的な実践」、「実用的な実践」それと「道徳的な実践」の3つに集約する。「技術的な実践」は技術や技能の分野の実践である。ビーバーのダム造りの能力もまたその一例である。「実用的な実践」はあらゆる意味での社会性の能力の分野のことである。「利巧」や「賢い」さらには「世間知」とも表現されるコミュニケーション能力の分野の実践である。「技術的な実践」が、われわれが生きていくためのハード面というなら、「実用的な実践」はそのためのソフト面とでも言うのが相応しい。カントはこのようなことを念頭にして、われわれは「さまざまな意図のための手段を発明する」。例えば、「パンを食べたいと思う人は、粉挽きを考案しなければならない」。しかし、こういった類のことは、「もっぱら理論的な原理にすぎない」と述べている（以上、5-26、7巻156頁）。言い換えるなら、カントによると、「技術的な実践」と「実用的な実践」は、生活のための know-how は実践の理論的な分野である。では実践の実践とは何かということになる。最後に上げられる「道徳的な実践」が、カントが一般に「実践」と呼ぶときの「実践」のことである。カントがそのように述べる理由は、きわめて明解である。

あらゆる実践には意志がともなう。know-how に属する実践の理論的な分野において、意志は自分に与えられた事物や状況に応じて、「自然の因果の法則に従って」、行為する（5-44、7巻186頁）。この場合、意志は自然に支配されていることになる。理性という知性の能力を有する人間にとって、自然現象に支配され、自然現象に従属する行為は、本当の意味での実践とは言えない。そうではなく、「純粋な理性能力」に従って、意志し、行為することのうちにのみ、人間の自由で自律した実践がある（『実践理性批判』5-44～45、7巻186～187頁）。このようにカントは考えるのである。つまり本来的に、実践の本質は道徳的であることの内にもみあるというのである。カントが「実践的」という言葉でもって もっぱら「道徳的実践的」という意味を表現するのはこのような理由によるのである。

以上のことを踏まえて、カントは、人間には「二重の性質」(zweifache Qualität) がある、と述べる（『道徳の形而上学』6-418、11巻287頁）。概念の整理の便宜上、概念の頭にそれぞれ a)、b)、a')、b')の

記号を付す。人間の「二重の性質」とは、

a) (動物の種の一つとしての)「感性的存在者」(Sinnenwesen)、それと b) (単なる理性的存在ではない)「理性存在者」(Vernunftwesen) との二つの性質のことである。(『道徳の形而上学』6-418、11巻 287～288頁)

b) の(単なる理性的存在者ではない)「理性存在者」とは、理論的理性能力のみならず、道徳的人格を有する理性的存在者のことを言う。カントは、a) の「感性的存在者」と、b) の「理性存在者」の人間の二つの性質について、さらに次のように説明する。a) 「感性的存在者」については次のようである。

「自然の体系における人間は、さほど重要ではない存在であって、大地の産物として、〔人間の〕持っている価値は他の動物と共通の価値 (pretium vulgare 通俗的価値) である。人間が悟性〔という知的能力〕においてこれらの動物に優っており、自己自身で目的を立てることができるということですら、せいぜい人間に、人間に他のものにまさるその有用性という外的価値 (pretium usus 有用価値) を、すなわち、物件としてのこれら動物との交換において、商品としての価値を与えるにすぎない。しかしこの場合に人間は、普遍的な交換手段であり、それゆえにその価値が卓越しているといわれる貨幣 (pretium eminentis 卓越した価値) よりも低い価値しか持たないのである。」(『道徳の形而上学』6-434、11巻 310～311頁)

このような自然体系における人間、つまり自然界の一員としての人間を、カントは「動物人間」(Tiermensch) と呼ぶ(『道徳の形而上学』6-435、11巻 311頁)。

しかしながら、

b) 「理性存在者」については次のようである。

「人格としてみられた人間、すなわち道徳的=実践理性の主体とし

てみられた人間は、すべての価値を超えている。……人間は尊厳(絶対的内的価値)を有し、……人間の人格における人間性は、他のあらゆる人間に〔自分を〕尊敬するよう要求することができるのである。」(『道徳の形而上学』6-434~5、11巻311頁)

カントによると、われわれ人間は自分を(自分の動物的本性にしたがって)感性的存在と観るか、あるいはまた(自分の道徳的素質にしたがって)英知的存在と観るか、それが、自分をa)「動物人間」(Tiermensch)という「取るに足らない存在」にするか、それともb)「理性人間」(Vernunftmensch)という「尊厳」に値する存在になるかの分岐点である。(『道徳の形而上学』6-435、11巻311~312頁)カントは、人間のa)の「感性的存在者」とb)の「理性存在者」の「二重の性質」が、まるで人間の種別化でもするかのようにならぬようにa)の「動物人間」とb)の「理性人間」と言い換えるのである。最大限の誇張表現法によって、両者の相違を強調するのである。b)の(単なる理性的存在ではない)「理性存在者」つまり、b)の「理性人間」の特性にこそ人間が「単なる自然の生き物すべてに優越する尊厳(特権)」(Würde (Prärogativ) vor allen bloßen Naturwesen)の根拠であり、資格であることを主張するのである(『道徳形而上学の基礎づけ』4-438、7巻79頁)。

カントはわれわれの理性は理論的に使用されるばかりでなく、実践にも使用されることに注目する。実践は、技術的実践に始まり、実用的実践を経て道徳的実践へと段階的に発展する。しかし、カントによると、理性の実践的使用における技術的実践と実用的実践は、理性の理論的使用の理論面が実践面に投影されたものである。理論的能力と同様、程度の差こそあれ、人間以外の動物にも確認される現象である。ビーバーや蟻や蜜蜂の生態はそのことをわれわれに教える。したがって、人間が理論的であること、実践において技術的かつ実用的であるということは、人間と他の動物を区別の際の指標にはならない。この段階までの理性的動物としての人間は、カントによると「理性能力を備えた動物」(animal rationale)、「単なる理性的な生物」(bloß vernünftiges Wesen)にすぎない。他の動物との潜在能力の共通性の側面からみて、「動物人間」(Tiermensch)であるにすぎない。

とは言え、カントの見事なまでの誇張表現法は、また誤解の温床にもなり得る。プラトンの「真似（ミーメーシス）」の文章作法²⁸に倣い、伝記作家のヤハマンに登場してもらい、そのへんのところを直接語ってもらおう。そして、カントに対する誤解の可能性を取り除いてもらおう。

「率直な人カント der Freimütige Kant」において神と未来の生存とに対する信仰をあからさまに否認する人は、多分この、もしくはこれに似たカントの言葉を誤解し、また歪曲したのでありましよう。カントは無神論者でも唯物論者でもありませんでした。そういう主張をする人はこの偉大な人物を個人的に知らなかったか、或いは少なくとも理解しなかったのだと信じます²⁹。」

ヤハマンに勇気づけられて、次の様なことを付け加えたい。カントは『判断力批判』で、「美」は人間のみが浴することのできる「恩恵」である。快適は、動物にもある。善は神にもある。しかし、美だけは「動物的であるがそれでも理性的な存在者、しかしまたたんに理性的ではなく、同時に動物的でもある」人間にのみ与えられた「恩恵」である。そのように言っている（『判断力批判』5-210、8巻64～5頁）。『純粋理性批判』では、われわれの「生の全体」（das ganze Leben）は、「われわれの身体」（unser Körper）、われわれの「感性的な動物的生」（das sinnliche und animalische Leben）それと、われわれの「純粋な精神的生」（das reine und spirituelle Leben）からなる（『純粋理性批判』A 778～9、B 806～7、6巻67～68頁）。そう述べる。われわれの「生の全体」（das ganze Leben）とは、われわれ人間そのものという意味である。われわれは、身体と動物的生と精神的生のどれ一つを欠いても、人間として存在しえないことをカントは語るのである。このことは、カントにおいて、われわれ人間

²⁸ プラトン『国家』（第3巻-6）（藤沢令夫訳『プラトン全集 11』岩波書店、1976年）194～198頁。

²⁹ ヤハマン著、木場深定訳『カントの生涯』97頁。R. B. Jachmann, *Immanuel Kant geschildert in Briefen an einen Freund*, Königsberg, 1804. (Kant Biographien, Volume 5, Thoemmes Press, 2002.) S. 122.

存在の神聖な事実であり、恩恵の源なのである。

更に直接的に関係する箇所では次のようである。カントは『人間学』で、「実用的な見地」から社会一般の知識のレベルで「技術的素質、実用的素質、および人間の本性における道徳的素質」について取り上げている。しかしそこでは、技術的素質と実用的素質を一括りにした上で道徳的素質と二分法的に両者の相違を強調する姿勢は見られない。そのいずれの発達の段階においても3つの素質は、「理性的動物」(ein vernünftiges Tier)としての人間を他のあらゆる「地球に生きる住民」(die lebenden Erdbewohnern)から特徴的に際立たせると、述べられている(『人間学』7-323~4、15巻313~315頁)。

カントの思考は、次の3つの対句を基礎にして行われる。それは、1) 分析と総合、2) 二分法と三分法、3) 解明と拡張、の3つの対句構造のことである。これは、カントを理解する上での重要な要点の一つである。二分法は分析の論理であり、三分法は一をもって二を統合する総合の論理である。分析は解明であり、総合は拡張である。カントは分析のあとの総合を重視し、解明のあとの拡張を志向する。ところで、カントは道徳の領域で、二分法によって、人間の感性的な性質と理性的な性質を截然と区別して見せた。われわれはその後に何を期待することが許されるのであろうか。

3. 道徳の実践のみに与えられる「拡張の権能」について

カントは『実践理性批判』の早い段階で「純粹理性は実践的使用において、思弁的使用においてのみではなしえない拡張の権能をもつことについて」(『実践理性批判』5-50~57、7巻195~205頁)という一章を設けている。この章は「スコットランドの哲学者ヒュームの懐疑」との対決の事実上の最後の論述である。訣別とも感謝とも報告とも捉えることの出来る、言うに言われぬ情感の豊かな一章である。

それは、カントがデカルトを語る時にはないものである。カントがデカルトを斥けた時に言った有名な言葉がある。デカルトの「我思う、故に我在り」を「誤ったデカルトの推論」として、カントは斥ける(『純粹理性批判』A 354~5、5巻63頁)。この際のカントの判定基準は、あくまでわれわれ人間の理性の本性の自己吟味に耐えられるかどうかであ

る。カントは、人間の理性の本性の吟味や検査に基づく、カントの「批判的な」「反論」は「ただその主張が根拠をもたないということだけであって、その主張が正しくないということではない。」（『純粋理性批判』A 388、5巻91頁）こう言うのである。デカルト哲学を単なる「空想的な学問」（eingebildete Wissenschaft）に過ぎないとして斥けるのである（『純粋理性批判』A 395、5巻96頁。下線は引用者による）。また1755年カントの31歳の時からの26年におよぶデカルトの神の存在証明との対決³⁰を語る有名な話が『純粋理性批判』にある。「現実的な百ターレルは、可能的な百ターレル以上のものをいささかも含まない。……しかし、私の財産状態においては、百ターレルの単なる概念（つまり百ターレルの可能性）においてよりも現実の百ターレルにおいてのほうがいっそう多いのである（『純粋理性批判』A 599 B 627、5巻287～288頁）。この100枚の銀貨の喩話は、手持ちの銀貨100枚と頭の中で考えている銀貨100枚とは同じものではあり得ない、ということである。そのいずれもが、デカルトの合理論一辺倒の思想に対するカントの違和感の表れである。デカルトの哲学のセンスに対する苛立ちを表現するものである。

しかし、その教育法がルソーの『エミール』に影響を与えたと言われている、ロックの「まず私たち自身の能力を検討し、自分の知性が扱うのに適した対象と適さない対象が何であるかを見ること」という言葉に、カントは痺れて哲学する。この経験論者のロックの学問姿勢が、カントの「批判」（クリティーク）つまり理性の「自己吟味」の手本である。ロックの経験論のあとに続いたヒュームは、懐疑の落とし穴に陥った。われわれ人間にとって何一つ確実なものはない。そのように言うわれわれ自身もまた決して確実なものではない。何故なら、ヒュームによると、われわれが人格や自我と呼ぶものは、現れては消え、消えては現れ、絶えまなく流動する「知覚の束」に過ぎないからである。カントはロックの寛容な経験論に失望する（『純粋理性批判』A IX、4巻16頁）。論理の合理性に魅了されたヒュームの経験論が導き出した結論は、深刻な懐疑論であった。カントにとって、デカルト、スピノザそしてライプニッツの

³⁰ 拙論「カントの超越論的哲学への道——神の存在証明をめぐる——」（藤女子大学キリスト教文化研究所『紀要 第3号』2002年所収、57～82頁）

合理論者は、いずれも滋味に富む敵対者であった。他方で、ヒュームは論理の合理性に潜む魔力の恐ろしさをカントに教えた同朋であった。カント哲学はロックの経験論的哲学姿勢、デカルト以来の合理論の体系性、それとヒュームの因果論に対する、受容と対決と咀嚼の歳月の成果である。それがカントの超越論的哲学である（拙論はこれについては触れない）。

この「純粋理性は実践の使用において、思弁的使用においてのみではなしえない拡張の権能をもつことについて」という章は不思議な一章である。次に引用する一文ではじまり、続けて要約して引用した一文で終わる。その間はヒュームの懐疑と因果性の話で終始する。「拡張」の語ではじまり、「権能」の語で閉じられる。カントの難解な文章を、突然引用することをお許し頂きたい。次の様である。

「われわれは道徳的原理を根拠として、因果性の決定根拠を感性界のすべての制約を超えたところに置き移す因果性の法則を確立したし、また英知界に属するものとして決定されうような意志を、したがってこの意志の主体（人間）の……認識を感性界の限界を超えて拡張した。（『実践理性批判』5-50、7巻195頁）

さらに続ける。

「超感性的なものの領域において」、「英知としての存在者」さらには、「超感性的存在者」（神としての）を「類推によって」「想定したり前提したりする権能」さえもが与えられる（『実践理性批判』5-56～57、7巻204～205頁）

道徳の実践は思考や理論の決してなし得ないことを可能にする。感性的世界の閉塞感からわれわれを解放する力と正当な権利がある。道徳の実践は、われわれの存在のあり方の拡張と超感性的存在者（神）に馳せる唯一の道にして突破口である。これがカントの伝えたいことである。

4. 結 び

「人間とはなんであるか？」をめぐる、「理性的動物 *animal rationale*」という概念を軸にしてカントの思想を紹介するにあたって、以下の順に論を進めた。

1) 「第二章」の後に挿入掲載した「論文・出版物一覧(その2)」の続に続けて、カントの「批判」(クリティーク)はわれわれの日常語の批判の意味とは異なることを述べた。カントの「批判」とは簡潔に言えば、理性の「自己吟味」のことであること。2) 「第三章 カントの4つの問い」において、1. 私はなにを知ることができるか?(形而上学の問い)/ 2. 私はなにをなすべきか?(道徳の問い)/ 3. 私はなにを希望することが許されるか?(宗教の問い)/ 4. 人間とはなんであるか?(人間学の問い)。以上の4つの問いは、それぞれ『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』、『人間学』に対応すること。3) 「第四章 理性的動物の二重性」において、カントの基本的人間観を紹介した。人間は「動物として、理性的動物として」地上に生きるものであること。カントの「理性的動物」の概念は、素質としての意味と目指すべき理想としての意味との二重の意味を有すること。

4) 「第五章 カントの時代の哲学的環境の確認 1. 「理性的動物」という言葉の誕生とその意味の変遷」において、「人間は理性的動物 *animal rationale* である」という定義は、古代ギリシアのアリストテレスの「言葉をもつ動物」(*zoion logon echon*)という人間の定義に由来すること。「理性的動物 *animal rationale*」の意味は「理性を備えた動物」、「思考能力を備えた動物」、「思考する生物」であること。「思考する生物」としての「理性的動物 *animal rationale*」は、カントの時代にはすでに、動物の生態研究の発達の影響で、学問的な真値を失っていたこと。しかし、一般に依然として最も有効な人間の定義であったこと。5) 「2. カントの時代が直面した哲学上の2つの難題——デカルトの合理論の身体の問題とヒュームの経験論の懐疑の問題」において、カントが慨嘆するほどに、デカルトの合理論とヒュームの懐疑論のもたらした問題は深刻であったこと。

6) 「第六章 理性の能力の拡張と「理性的動物」の概念の転換 1. デカルトの身体論とヒュームの懐疑論の超克」において、デカルトの人

間の身体は物体であるという主張に対抗するためには、「人間は動物である、ただし理性を備えた」という伝統的な通用命題が最も有効であつたと思われること。しかし、思考と論理の人ヒュームの懐疑の超克のためには、道徳の領域での人間の理性の能動的な力を証明することが必要であつたこと。哲学者たちが、道徳の問題を哲学のテーマとして、全体的に真剣に取り上げたことのない時代に、カントは理性の能力が理論の領域と道徳の領域において、共に働くことを明らかにしたこと。そのことに伴って、理性の能力の新たな解明がなされ、拡張すること。ヒュームの懐疑の根絶は、最終的にカントによる道徳的人格の实在性の証明によってなされること。このことを最も現実的な力を持って教える実践理性の道徳的命法の「自分の人格のうちにも他のだれもの人格のうちにある人間性を、自分がいつでも同時に目的として必要とし、決してただ手段としてだけ必要としないように、行為せよ。」(『道徳形而上学の基礎づけ』4-429、7巻65頁)を掲載した。

7)「2. カントの実践についての基本的な考え」において、カントによると、実践の概念は「技術的な実践」、「実用的な実践」それと「道徳的な実践」の3つに区分されること。カントは、道徳の領域において、「技術的な実践」と「実用的な実践」を一括りにして、これを理論的な領域の実践と見なすこと。3つ目の「道徳的な実践」を人間に特有の自由で自律した実践であると見なすこと。これによって、三分法的に区分される実践の概念は、道徳の領域において二分法的に区分されること。道徳の領域での人間の「二重の性質」の思想はこのようにして、誕生すること。それは「(動物の種の一つとしての) 感性的存在者」対「(単なる理性的存在ではない) 理性存在者」/「動物人間」対「理性人間」、という対立構図で表現されること。

しかし、プラトンの「真似(ミーメーシス)」の文章作法に倣い、伝記作家のヤハマンの登場を得て、この極端な対立の構図は道徳哲学の領域に限ってのことであること。そのことの誤解のないように、カントの主要な論文であり、カントの4つの問いに対応する残りの3つの論文の中から1つずつ紹介した。①「私はなにを知ることができるか?」の問いに対応する『純粹理性批判』には、われわれの「生の全体」は、「われわれの身体」、われわれの「感性的な動物的生」、それとわれわれの「純粹な

精神的生」からなる、と述べられている。われわれの「生の全体」とは、われわれ人間そのものを意味する。われわれは、身体と動物的生と精神的生のどの一つを軽んじても、健全な人間として存在することが不可能である。そうカントは述べる。②「私はなにをなすべきか？」に対応する『実践理性批判』は、道徳の領域である。③「私はなにを希望することが許されるか？」に対応する『判断力批判』には、「美」は人間のみが浴することのできる「恩恵」である、と書かれている。「動物的であるがそれでも理性的な存在者、しかしまたたんに理性的ではなく、同時に動物的でもある」人間にのみ与えられた「恩恵」である。カントはそう述べている。④「人間とはなんであるか？」の問いに対応する『人間学』は、「実用的な見地」から社会生活に役立つと考えられることを広範囲にわたって取り上げる。社会一般の知識のレベルでの「技術的素質、実用的素質、および人間の本質における道徳的素質」について取り上げている。しかしここでは、技術的素質と実用的素質を一括りにした上で道徳的素質との相違を二分法的に強調するという姿勢は見られない。そのいずれの発達の段階においても3つの素質は、「理性的動物」としての人間を他のあらゆる「地球に生きる住民」から特徴的に際立たせると、述べられる。ここでは、実践の三分法は当然のこととして、語られている。

8) 「3. 道徳の実践のみに与えられる「拡張の権能」について」において、カントのロックやヒュームの経験論との親和性。カント哲学は、ロックの哲学姿勢、デカルト以来の合理論の体系性、それとヒュームの因果論に対する、受容と対決と咀嚼の歳月の成果であることを述べた。カントにおいて、道徳の実践には、感性的な世界の閉塞感からわれわれを解放する力があること。このようにしてカントによって道徳の実践は、われわれの存在のあり方を拡張する。つまり、超感性的存在者(神)に思いを馳せることを可能にすることが明らかになったのである。

おわりに

この度の論文はカントのことを出来るだけ多くの方々を知って頂きたいと思って書き始めました。気軽に通読して頂ける日常の通用語で紹介するように努めました。量的にも余り負担感のない様にと心掛けたつもりです。しかし、いつの間にかこのようなことになっておりました。「人

間とはなんであるか？」をめぐる、「理性的動物」という概念を軸にして、カントの人間観の紹介を試みました。その過程で、「理性的動物 *animal rationale*」のフレーズの誕生の経緯と意味の多義性、それと意味の変遷が明らかになりました。「理性的動物 *animal rationale*」という言葉は、「言葉をもつ動物」や「公に政治を論じる権利をもつ動物」にもなりえたこと。「理性的動物 *animal rationale*」には「理性を備えた動物」、「思考能力を備えた動物」更にはもっとあっさり「思考する生物」の意味があることを知りました。「思考能力」は人間以外の動物にも認められる以上、人間のみ固有な「道徳的な実践の素質」に基づいて、カントの理想とする「理性的動物 *animal rationale*」とは、〈道徳的な動物〉を意味することが明らかになりました。「理性的動物 *animal rationale*」は、カントの理想とする人間観に最も相応しい意味を持つようになりました。拙論の「第六章 3. 道徳の実践のみに与えられる『拡張の権能』について」の処でほんの少し触れたように、カントは、われわれは道徳の実践によって頭の回転だけでは得ることのできない恩恵に浴することが出来ると言います。来世と神の存在を信じる事が出来る道が開ける、と言います。

カントは、日頃「誠実さ」を自分の最上の心構えにする人は「最も偉大な才人よりも尊厳という点で間違いなく優っている」（『人間学』7-295、15巻270頁）と述べます。このようなカントの言葉には、何かほっとさせられるものがあります。技術的な実践として、自立するために20歳位までにはある程度の技能を身につけておくのが良い。実用的な実践として、40歳頃までには利巧で如才なく仕事を進め円満に生活するための社会性がどうか身につくであろうし、またそのようになるのが望ましい。道徳的な実践として、「徳の知恵に達する年代はほぼ60歳と設定することができる」（『人間学』7-201、15巻132頁）。このように言っています。『道徳の形而上学』の最後の処で、大変だと思ふことこそ、余り無理をしないのが良い。「元気な明るい心で」続けるのが良いと、深い愛情をこめて若い学生たちに向かって語っています。まるでカント自身のことを話しているようです。『実践理性批判』の終わりの処で「たとえば10歳の子供」のために、誠実のセンス、してよい事としてはいけない事の道徳のセンスを磨くためのマニュアルをみんなで作り上げる努力を

しょうと、呼びかけます。カントなりの具体的な案を提示したうえで、次の世代を担う若い人たちに向かって声を掛けたりしています。そのような諸々のことが、カントの誠実やカントの道徳の内実を明らかにしてくれます。

カントは道徳の領域で、人間の性質を感性的性質と理性的性質とに二分法的に峻別して見せます。しかし、この徹底した峻別は、われわれが自分たちの生き方を考え、単なる感性的生から道徳的生へと自己の生の拡張を希望するようになるための、カントの一つの布石であろう。極端なまでのカントの誇張表現は、われわれの生を単なる感性的生の幸福から道徳的生の幸福へと拡張的に導くための、誤解を恐れぬカントの情熱の現れであろう。カントの思想に親しみカントの人柄を知るにつれて、わたくしにはそのように思えてなりません。